

『吾輩は猫である』 靈感

Junko Higasa 2016.3.17

第六章で扱われるのはインスピレーションである。想う女との霊の交感の夢を現実のように語る寒月に、迷亭が自分と立町老梅の失恋経験を話す。迷亭の相手は結婚式用文金高島田の鬘の中に欠点を隠していた。迷亭はその時から物事をじっくり見るために近眼になった。老梅の相手は、いくら徳川の殿が移り住んだ静岡でも一夜作りの嫁はありませんと断った。その時から老梅にとって図書館は知識を得る所ではなく小便をするために立ち寄るだけの場所となった。迷亭は寒月に仄めかす。「女を外見だけで判断してはいけない。学問で解けないのが女である」と。さらに苦沙弥がミュッセを挙げる。「女より軽い者はない」と。女は古来より生き延びる術を心得て変化する。男はなかなか変わらない。女が強くなった昔も、逞しくなった今も、恋に思い詰めるのは男ばかり。

ここで漱石は、古代ギリシャの哲学者が語る「女というもの」を総括すると同時に、小泉八雲、泉鏡花の名を挙げ、その霊的要素を取り入れて感情「f」を動かす実験をしている。そして上田敏の名を挙げ、当時流行した新体詩も披露する。漱石は『猫』で、自らの『文学論』の実証を積み上げているのである。

そして最後に、インスピレーションという朦朧体に見せかけて「天狗になって大和魂という言葉を口にする戦わない男たち」を批判した。迷亭は駄弁を振るえず、その新体詩を捧げられることを断った。